

Wives and Daughters における 「二人の母親」のテーマをめぐる考察

市川 千恵子

序

Elizabeth Gaskell は Smith Elder 社の George Smith に 1863 年 9 月 20 日付の書簡で、*Household Words* のクリスマス特集号に掲載する作品のテーマを知らせた。それは “Two Mothers”¹ であった。この時点ではどのように展開する意向であるのかは具体的に言及されていない。Gaskell は、四人の娘を持つ母親であった。この事実はヴィクトリア朝の女性作家のなかで彼女を稀有な存在とさせている。自身の「母」という経験から、従来からの「娘の物語」ではなく、「母親自身の物語」を書くことに挑もうとしたのかもしれない。だが翌年 1864 年 5 月 3 日付の Smith 宛の書簡では、前述した作品のテーマの変更が報告された。

I threw overboard the story of the ‘Two Mothers[’] because I thought you did not seem to like it fully – and I have made up a story in my mind, – of country-town life 40 years ago, – a widowed doctor has one daughter Molly, – when she is about 16 he marries again – a widow with one girl Cynthia, – and these two girls – contrasted character.... (*Letters*, 731)

こうして構想の段階において「二人の母親」のテーマは撤回され、「二人の娘の対比」が新しい小説の中心に置かれる。「二人の母親の物語」は、夫と父親を媒介とした「妻と娘の物語」となってしまった。しかし本稿では父親と娘、そして夫と妻の関係の陰に潜む「母親と娘」の関係に注目したい。撤回された「二人の

母親」のテーマは、Mrs Gibson と Mrs Hamley の二人に反映されているとみなされる。*Wives and Daughters* において Gaskell は母と娘の間に存在する問題をどう提示しているのか。結末では結婚という家父長的な形態をとりながら、この問題をいかに解決しようと試みているのか。本稿ではこの二点を中心に考察していきたい。

I

Gaskell は Mrs Gibson と Cynthia における母と娘の関係によって、娘の結婚が母親に何をもちたらしめるものであるかを巧みに描き出す。Mrs Gibson が Towers で初めて出会った Molly に打ち明ける身の上話は、次の通りだ。

I married a Mr Kirkpatrick; he was only a curate, poor fellow; but he was of a very good family, and if three of his relations had died without children I should have been a baronet's wife.²

社会的地位を欲する彼女は息子の誕生を期待する。だが娘の誕生、また夫の死によって結婚に託した彼女自身の夢は当然実現されずに終わる。彼女は若い娘を抱えながら、再び自分で生計を立てなければならない。結局彼女は欲していた富や社会的地位のどちらも手に入れることはできないのだ。

しかし自分が果たし得なかった希望は、娘である Cynthia にそのまま投影される。Molly から Cynthia も一緒に暮らすことになるのか、と質問されたときに、Mrs Gibson はこう答える。

I thought of nothing else but Cynthia's going out as a governess when she had completed her education; she has been brought up for it, and has had great advantages.(132)

Mrs Gibson は Cynthia のフランス留学の目的が governess となるための準備であることに強調を置く。Cynthia がフランスの学校で習得するものは、教養と洗

練された身のこなしである。これらは彼女の経済的自立の手段とすることもできる。しかし同時に彼女の容姿の美しさが加わることで、良き結婚の機会を得る手段ともなりうるのだ。Mrs Gibsonの意図が後者の方にあるのは疑いの余地がない。娘を結婚へと導くために、まず彼女はCynthiaをOsborneと結びつけようとする。Hamley家の古い家柄と領地は、夫人の目には望ましいものとして映るからだ。彼の病が発覚すると、これまで疎んじてきたRogerが次の標的となる。この行為は後で夫に非難されることになる(401)のだが、彼女の行為の背景には自身が経験した経済的困窮がある。

I wonder if I am to go on all my life toiling and moiling for money? It's not natural. Marriage is the natural thing; then the husband has all that kind of dirty work to do, and his wife sits in the drawing-room like a lady. I did, when poor Kirkpatrick was alive. Heigho! it's a sad thing to be a widow. (100)

このように彼女は未亡人としての生活を嘆き、依存的な生活を望んでいるのだ。彼女は居間を女性の空間としてみている。その場所に訪問客を招き、自ら選んだ趣味のよい品々のなかで、彼女は女王のごとく君臨し、人々からの尊敬を得たいのである。彼女の価値観から判断すれば、当然娘には社会的地位と生活の安定を確保しなければならない。したがって将来性があり、また頑強な肉体の持ち主であるRogerは、娘の夫候補となるのだ。若い二人は母親の巧妙かつ狡猾な策略に見事にはまる。その様子は次のように描かれている。

Mrs Gibson was constantly making projects for throwing Roger and Cynthia together, with so evident a betrayal of her wish to bring about an engagement.... Cynthia heard and saw as much of the domestic background as she did, and yet she submitted to the *rôle* assigned to her! To be sure, this *rôle* would have been played by her unconsciously; the things prescribed were what she would naturally have done; but because they were prescribed.... (363)

Cynthiaは無意識のうちに自分に期待される役割を認識し、演じてしまう。彼女はいともたやすく予め用意されたレールの上を歩もうとしてしまうのだ。やがて富裕で若くハンサムなLondonの弁護士Mr Hendersonが出現する。彼はCynthiaに求婚するためにHollingfordを訪れる。Mrs Gibsonはそのことを知ると、Cynthiaを“my precious child” (630)と呼び、“you accept him? Say yes, Cynthia, and make me happy!” (630)と娘に懇願する。それに対しCynthiaは、“I shan't say “yes” to make any one happy except myself, and the Russian scheme has great charms for me.” (630)と反論する。しかし結局彼女は母の期待通りにMr Hendersonの申し出を受け入れてしまう。娘がその求婚を承諾したと知るや、母親の歓喜は“the seventh heaven of ecstasy” (635)にまで達する。母はすでに断念してしまった自身の夢を娘が実現することで充足感を得る。このようにMrs Gibsonが過去に挫折した自らの理想を再生させ、娘を通して実現させようとするのは、彼女の「再生したナルシズム」³に他ならない。

なぜ母親は娘に過剰に干渉し、あたかも娘を自分自身の分身とみなしてしまうのか。「母と娘は同一」という錯覚は、母親が「産む性」であり、また娘が同性であるということから生じるものだ。Gaskellは娘と自身との生理的一体感をMarianneの成長記録にこう残している。

I had no idea the journal of my own disposition, & feelings was so intimately connected with that of my little baby, whose regular breathing has been the music of my thoughts all the time I have been writing.⁴

このときMarianneは生後6か月だった。この時期には娘はその生命を母親に全面的に依存している。母と娘は未だ「個」として分離不可能な状態にある。Nancy Chodorowは、こうした母と娘のナルシズム的な自己同一化が長期に渡るものであると指摘する。⁵ 女の子の場合では、エディプス期前期に性の対象が母親から父親へと移行するので、男の子ほど初期段階の母子の一体化を清算してしまう必要がないからだ。幼児期の生理的な一体感はやがて精神的なものへと移行していく。したがって、Cynthiaのidentityの混乱には、母親に所有されたいという彼女の潜在的な欲望が示されていると考えられる。彼女は富と高い社会的地位を

もたらず結婚という母親の欲望に従い、母の価値観を自分のものとして受容してしまうのだ。母なるものの機能を言語・精神分析の領域から考察する Julia Klisteva は、こうした母と娘の一体化から経験する娘の困惑を自己認識の道具としての「鏡」を使って分析している。⁶ 娘は鏡に映る自分の姿を確認しようとする。そのとき母親の姿は鏡の中に留まり、娘の自己の形成を妨げる。同一の鏡に映った二人の姿に、娘はどちらが自分自身であるのか、とまどうことになる。そのとき娘は、自らを主体として確立するためには、母親との一体化から脱しなければならない。Gaskell は娘の Florence の結婚に際しての心情を Charles Eliot Norton に宛てて、“... I have had to take a good while to reconcile myself to the parting from this dear child, who still seems so much a child, & to want ‘mother’s shelter’ so much.” (*Letters*, 705) と記した。Florence が結婚したのは 21 歳のときだ。Gaskell 自身もほぼ同年齢で結婚した。にもかかわらず、この書簡にはいつまでも娘を子供だとみなし、‘mother’s shelter’ のなかに留めておきたいという母親の願望が示されている。

Wives and Daughters における Mrs Gibson と Cynthia の関係では、娘の社会化としての結婚は、むしろ母と娘の一体感を強化する契機となる。Cynthia は母親の欲望に従うことによって、ようやく母親を深く愛し、また母親の愛を感じることができるのだ。Mr Henderson の求婚を受け入れた後、Cynthia の母親への憎悪の感情が抑制され、また彼女は母親の仕事、再婚にとって自分が常に重荷であったことを認める (628) ほど母親を理解できるまでに成長を遂げる。Mrs Gibson と Cynthia の間では、母と娘のナルシズム的な自己同一化は引き延ばされ、さらには和解の手段となっているのである。

II

Wives and Daughters では、娘の成長過程において母親が担う二つの義務が Mrs Gibson と Mrs Hamley の二人に分け与えられている。そのことを明らかにするのは、Molly の義母の出現だ。Mr Gibson は Molly に宛てて書かれた Mr Coxe のラブ・レターを発見する。この手紙によって、娘の身体が管理される必要のある年齢に達したことを父親は知らされる。そのため彼は、娘に中流階級の

女性としてふさわしい“manners”を身に着けさせるために適切な助言を与える人物の必要性にせまられる。このことが彼に再婚を決心させるのだ。したがって、義母となる Mrs Gibson は、母親として Molly を“lady”へと導き、社会的価値を付加しなければならない。ここでいう社会的価値は「女性の規範」を指す。「女らしさ」の基準に Molly を近づけていこうとする彼女の助言の多くは、ドレスの選択や装い方、また lady としての振る舞い方といった女性の表面的な要素に集中する。こうした指導は周囲の、特に男性の視線や賞賛を集めるために機能しているものといえる。なぜならば Mrs Gibson には、父親と未来の夫との間で近い将来行われる交換において、媒体の役割を演じることが要求されているからだ。つまり一人の男性である父親から、別の男性である夫へと引き渡す役割である。

一方で、Mrs Hamley と Molly の二人は、精神的な母と娘として考えられる。娘を亡くした母である Mrs Hamley は Molly を娘のように愛し、母を亡くした娘である Molly は Mrs Hamley を母親のように慕う。Cynthia が母親への怒りを Molly に吐露するときに、Molly は Mrs Hamley の“goodness”こそが世界で唯一変化しないものであるということに気づく(229)。そしてそれを自分自身の美德として引き継ぐことになるのだ。つまり Mrs Hamley は、Molly の「個人としての成長」という点で大きな役割を担う。Mrs Hamley から Molly へと受け継がれた“goodness”は「道徳的品性」というべきものであり、Molly に「どう行動すべきか」を見極めさせる。このような“guardian angel”としての不在の母親は、Gaskell の *Mary Barton* (1848) 及び Charlotte Brontë の *Jane Eyre* (1847) においても現れる。前者では Mary が父の罪を知り、自身の悲劇的な運命に押し倒されそうなときに叔母の Esther の姿となって出現する。Mary は半ば夢を見ているように、Esther を自分の亡くなった母親の亡霊だと思い、その胸に泣き崩れる。後者では Jane が Rochester に妻があることを知り、“passion”と“conscience”の二つの声の間で葛藤していると、“a white human form shone in the azure”が“My daughter, flee temptation.”と Jane にささやくのだ。⁷ 娘たちは夢や幻のなかで、かつての母と娘の未分化の状態へと回帰しようとする。両作品のヒロインたちにとって亡き母は道徳的な導き手である。そして彼女たちに変わることのない深い愛を注ぐ存在であるのだ。Mrs Hamley は回想

の中で常に Molly に “mother’s shelter” を提供し、永遠に理想の母であり続けるのである。

Mrs Hamley と Molly とが永遠に母と娘の「絆」によって結ばれていくうえで、二人は家父長制の絶対的権威から無縁でなければならない。しかし現実には母と娘がこの絶対的権威の支配から逃れることは難しい。家父長制の存続は、家父長制に適合する次世代を育て上げるべく女性たちに自発的な献身をさせることに依存している。女性は娘を持つようになると、「立派な母親」という理想像を与えられる。母親たちは無意識のうちにこの「立派な母親」になるべく、娘たちに様々な制限を加えようとする。Molly にとって新しい母親の存在は自身と父との “confidential friendship” (30) に介入するだけではなく、また父との暮らしの中で享受してきた自由をも奪う。Mrs Gibson の不在に味わう Molly の解放感は、“… I think I can be happy again; for months and months it has seemed as if I had got too old ever to feel pleasure, much less happiness again.” (459) と、ヴィクトリア朝の中流階級家庭での形式的な作法や、若い女性に加えられた制限が彼女にとっていかに居心地の悪いものであるかを物語る。

Mrs Gibson 自身は精神的・経済的に自立した生活を断念し、依存的な「妻」という立場を再び選択する。いわば父権制に自ら従属していく。「妻」という位置は、母親としての力を制限するものだといえる。夫を失った心労から床に伏す Aimée に生きる力を与えるのは、子供の存在である。つまり、「母親であること」が彼女を救うのだ。一方で Mrs Hamley は「妻」としての生活の中で、健康を損なっていく。このことは、「母であること」と「妻であること」との対照性を暗示する。Mrs Hamley は「母」である前に、「妻」として夫への服従が要求された。女性は家庭の中で夫への服従を第一に優先させるべきであるという教えは、Lady Cumnor から Cynthia に与えられる助言にも示されている。婚約を祝福するために訪れた Lady Cumnor は、“You must reverence your husband, and conform to his opinion in all things. Look up to him as your head, and do nothing without consulting him.” (639) と Cynthia に忠告する。このような結婚生活は、John Stuart Mill が *The Subjection of Women* (1869) で告発した家庭内の女性の隷属状態そのものである。⁸ そのような環境のもと、娘は女性の劣等性を家庭の中で学ぶ。また娘は母親の力の限界をやがて自分も引き継いで

いく運命にあることを知ることになる。Gaskell 自身が感じていた「母」としてのジレンマは、Fanny Holland に宛てた 1847 年 3 月 9 日付の書簡に伺うことができる。そのなかで Gaskell は娘たちとの関係を “companion and friend”⁹ でありたい、と記している。このとき娘たちの年齢は、上から 13、10、5、1 歳であった。ヴィクトリア朝において、また同時期にこのような年齢幅にある四人の娘たちに、道徳および知的教育を施すことが母親にとっていかに心労の種であったかは想像するに難しくない。本作品においても少女たちの教育の問題が反映されている。Mrs Gibson は母親、governess、そして教師として若い女性の教育に携わってきた。“All the trials of her life were connected with girls in some way.” (128) と描写されるように、彼女の試練の多くは少女たちをいかにして “lady” へと完成させるかという問題に関係しているのだ。再婚後も、この役割を継続していかなければならない。彼女は Mr Gibson との再婚を決心するとき、娘ではなく息子に対してならば、「良い母親」であることは容易であろう、と感じている (129)。息子であれば、彼女は様々な禁止を加える必要はない。この禁止こそが、母と娘の葛藤を生じさせる要因となるものだ。しかし彼女の役割が Molly に “lady” としての教育を施すものである以上、Mrs Gibson はこの母と娘の葛藤という難題と直面せざるを得ないのである。

Gaskell は自身の経験から、母親が娘にとって否定的なモデルとなる可能性を十分に認識していたに違いない。よって、母親を「母と娘の葛藤」から解放するために、作者は “guardian angel” としての「道徳的品性」の導き手という役割を Molly の理想の母である Mrs Hamley に付与することになる。彼女が Molly の回想の中で呼び戻されるとき、二人の間には何者も介入しない。

III

Molly が中流階級の若い女性として制限を加えられるのは、家庭の中ばかりではない。公的な空間においても、彼女の行動は Hollingford の婦人たちに監視されている。Molly が初めて直面する危機は、Mr Preston とのスカンダルである。彼女は Cynthia を救うために Mr Preston から Cynthia の古い手紙を取り返すという行為によって、Mrs Goodenough の誤解を生み、その噂は Hollingford

の町中に広められてしまう。“the power of ill-natured tongues” (545) は、Molly の行為の内にある自己犠牲という美德やこれまでの彼女の善良さを否定しようとする。ヴィクトリア朝の初期は“the reform of manner and morals”が推進された。家庭の中はもちろんのこと、社会の“manner and morals”の向上は中流階級の婦人に依存していた。また婦人たちも進んでその責任を果たそうとした。¹⁰ Molly は“I’m sure it was not wrong in morals, whatever it might be in judgment.” (545) と主張するものの、社会から孤立していく。Lady Harriet は、婦人たちの gossip から Molly を救済するために Molly を連れて町を歩き、Browning 姉妹の家に連名での“visiting card”を置く。中流階級の女性にふさわしい行動を人前にさらすという、Lady Harriet の策は功を奏し、やがて Molly への中傷は姿を消す。かつての彼女への人々の愛情も取り戻される。このように“etiquette”は中流階級社会に生きる女性にとっては必要不可欠なものなのである。¹¹ 社会との調和を図るためには Molly もまた Hollingford の婦人たちが守ろうとする上品な社会のルールへの服従を余儀無くされるのだ。

Molly は病を経て、少女から大人の女性へと成長する。Mr Preston とのスカンダル、そして Mrs Hamley の死が病の原因であることは明らかだ。この二つの問題を克服した Molly は、見違えるほど“accomplished lady”となり、交換対象としての商品価値をもつ存在へとかわる。夫から妻への指令を通して守られた Molly の身体の virginity は、“… it is but fair to you to say I’d rather give my child, – my only child, remember! – to you, than to any man in the world!” (678) という言葉と共に、父親から未来の夫へと差し出される。中流階級の若い女性として相応しい“manners”を習得し、かつ美しくあることは上品な社会への、そして望ましい結婚への切符となるのがここで証明されるわけだ。Roger は Molly の変化に気づく。それは、かつて Osborne が予言したものだった。

She had grown into delicate fragrant beauty just as he said she would: or is it the character which has formed the face? Now the next time I enter these doors it will be to learn my fate! (625)

と、Roger は Molly を初めて異性として意識することになる。性的魅力に満ち

た存在へと変わったその美しい姿は、彼の心を動かす。Molly の容姿の改善は Mrs Gibson の指導によるものだ。理想の女性として構築された Molly は、こうして家父長制を存続させるための機能としての婚姻へと取り込まれることになる。この場面での異性愛関係は Molly と Roger をつなぐものであるというよりは、むしろ同じ利益を共有するものとしての男性同士の関係をつなぐものだという印象を与える。父親と夫との間で行われる交換において、母親である Mrs Gibson の存在は疎外されている。彼女の理想を実現した Cynthia の結婚でさえも、その多くは London の叔父のもとでお膳立てされているのである。

このように母と娘は、婚姻という家父長的な制度によって断ち切られる。しかしながら、Gaskell は Mrs Hamley の “goodness”、つまり Molly が永遠不変だとみなす価値 (229) によって Mrs Hamley と Molly を強く結びつける。さらにこの “goodness” は Molly を文字通り夫人の娘になることへと導く。Molly は初めから Roger の “goodness and peace” (141) に引きつけられている。つまり Molly は未来の夫となる Roger の男らしい容姿であるとか、前途有望な科学者としての業績といった男性的価値ではなく、Roger の内面性にひかれているのだ。したがって Molly と Roger の結婚は、二人が Mrs Hamley から受け継ぐ “goodness” という価値観によって成就されるものとなる。Gaskell は「母親」を忘却の淵から救い出し、その存在を再び深く刻み付けようとするのだ。

結 論

Wives and Daughters において Gaskell は、娘の成長のために一人の母親が担うことになる「女性の規範」と「道徳的品性」とを別々のものとし、その指導的役割を二人の母親に課す。そうすることによって、家父長制において現実に存在する母と娘の間の亀裂と、母親にとっての理想的な母と娘の関係を提示する。また、このことによって娘が抱く母親の否定的なイメージが、家父長制イデオロギーによって生み出されるものであり、母親へと向けられる娘の怒りは、女性を取り巻く家父長制社会に向けられるべきであることを示唆しているのである。

最後に母と娘の対立から解放されている Mrs Hamley と Molly がその絆としている “goodness” について考えてみたい。Sarah Ellis の一連の “conduct

books”においては、精神的優越性は、“weaker sex”である女性の唯一の優れた点であることが繰り返し強調される。また、家庭内での夫の妻への支配を正当化するために女性の劣等性を主張する保守派の意見においても、女性の精神的優越性は広く認められていた。¹² しかし本作品において“goodness”は、女性特有の性質としてではなく、一個人の中心的価値として示されている。Rogerが科学的発見の旅に参加する決断を下したのは、父親の経済的負担を軽減するためだ。彼の利他主義は、結果として科学者としての成功を勝ちとることになる。Lady Harrietが観察するように、MollyとRogerは“each other’s good qualities” (653)を見つけ出すようにして、引きつけられていく。両者は内面の資質という点でふさわしい。父親と夫との利益の共有という印象を与えるヒロインの結婚を、Gaskellは、MollyとRogerによる、この中心的価値としての“goodness”の共有として成就させようとしたのである。

註

本稿は日本ギャスケル協会第10回大会(1998年10月10日)の研究発表の原稿を修正し、加筆したものである。

1. J.A.V.Chapple and Arthur Pollard ed., *The Letters of Mrs. Gaskell* (Manchester: Mandolin, 1997) 712. 以下書簡集からの引用は括弧内に *Letters* と略記し、ページ数を示す。
2. Elizabeth Gaskell, *Wives and Daughters* (Oxford: Oxford UP, 1987) 18. 以下、本作品からの引用は括弧内にそのページ数のみを示す。Mrs Gibson は一貫して風刺の筆致で描写される。夫人のこの一言(引用箇所)によって、作者は彼女のコミカルな印象を効果的に読者に植え付けることに成功している。
3. フロイトによれば、このようなナルシズムは「二次的ナルシズム」(secondary narcissism)であり、リビドーが対象備給から撤収され、自我に回帰することを示す。Sigmund Freud, “On Narcissism” (1914-16) in *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud* vol.XIV. trans. and ed. James Strachey (London: Hogarth Press, 1957) 参照。
4. 1835年3月10日付の日記より。J. A. V. Chapple and Anita Wilson, eds., *Private Voices: The Diaries of Elizabeth Gaskell and Sophia Holland* (Keele: Keele UP, 1996) 52. なお Marianne は1834年9月12日に誕生している。ちなみに日記の書

き出しではこの記録が母と娘の「絆」となることを願っている。

5. Nancy Chodorow, *The Reproduction of Mothering: Psychoanalysis and the Sociology of Gender* (Berkeley: U of California P, 1978) 104.
6. Julia Kristeva, "A Question of Subjectivity: An Interview" in *Feminist Literary Theory: A Reader* ed. Mary Eagleton (Oxford: Blackwell, 1986) 353. なお、原文は以下の通り。

I see a face. A first differentiation take place, and thus a first self-identity. This identity is still unstable because sometimes I take myself to be me, sometimes I confuse myself with my mother.
7. Elizabeth Gaskell, *Mary Barton* (London: Penguin, 1985) 286-7. および Charlotte Brontë, *Jane Eyre* (London: Penguin, 1985) 346.
8. John Stuart Mill, "The Subjection of Women" in *On Liberty and Other Essays* (Oxford: Oxford UP, 1991) 480-2.
9. Jenny Uglow, *Elizabeth Gaskell* (London: Faber & Faber, 1993) 158.
10. Catherine Hall, "The Early Formation of Victorian Domestic Ideology" in *Fit Work For Women* ed. Sandra Burman (London: Croom Helm, 1979) 参照。Hall は "manner and morals" の改革には福音主義が果たした役割が大きいと分析している。
11. Elizabeth Langland によれば、"conduct books" が個人に向けて行動の模範を示した一方で、"etiquette manuals" は上品な社会とその維持に貢献したとある。その意味においては Lady Harriet の判断は正しいものとなろう。Elizabeth Langland, *Nobody's Angels: Middle-Class Women and Domestic Ideology in Victorian Culture* (Ithaca: Cornell UP, 1995) 26-7. なお Sarah Ellis は "ill-natured gossip" はドレスや暮らしぶりに関わるもので、中流階級にふさわしい "elegance" や "manner" が欠如していることに原因があるとしながらも、悪意のある中傷は社会の調和を乱すものとして批判している。"The Women of England" in *The Select Works of Mrs. Ellis* (New York: J. & H.G. Langley, 1843) 96. また、Dinah Mulock Craik は社会のしきたりといった形式にこだわりすぎることは大切なものを見失う、と警告する。"Women of the World" in *Cristina Rossetti Maude and Dinah Mulock Craik A Woman's Thoughts About Women* ed. Elaine Showalter (London: William Pickering, 1993) 162-3.
12. Mill は、女性が男性より劣るとされているにもかかわらず、女性の精神的優越性ばかり

りが強調されることに懐疑的である。一般に認められた女性の性質というものは教育の結果であり、生来のものではないと主張する。Mill, 554-5.